

≪除夜の鐘国調の年いま終る≫

コタツに温くもぐりながら除夜の鐘の音色に聞き入り新しい年を迎えんとしている。過ぎ去つた365日の苦しかつたこと、悲しみ、楽しかつたこと様々の想い出が脳裏をかすめ、時は新しい時代に刻々と流れていく。

統計界にとつて40年は統計の年といわれた想い出多い年、新しい集計方法で国勢調査が行なわれた記念すべき年でもある。沢山の統計関係者の手によつて作成された調査個票による本県の人口は2,056,137人、いまその人達は静かに希望に満ち溢れた新しい年を迎えようとしている。

≪積み上げた数字が世相物語る≫

今年も、国勢調査や農業センサスなどの大調査をはじめ各種の統計調査が行なわれ貴重な資料がたくさんまとまつたわけである。これらの資料は、行政施策遂行や企業の合理化などのための基礎として活用されるわけであるが、これらの資料からその年の数字をみると、経済のうごきなどによつて生じるその時代、時代のすがたが、背景などがうかがわれて非常に興味深いものである。

≪出るまでが楽しみボーナス街へ消え≫

12月はボーナスの月、今年ほどの位もらえるだろうか、あれを買おうか、借金を払おうかなどと各自胸算用をしているうちが楽しみなものである。

ところが、いざもらつて封を切つてしまふところのお足と称され紙幣はアツという間に師走の街に消しとんでしまう。もつとも商店はあの手、この手でこの日にそなえ万全の布陣でお客を誘惑してくる。とても物価の上昇には追いつけない現状においては、ボーナスの価値がなんとなく軽く感じられるようである。

≪特価品あさる目の色手の動き≫

年の瀬も迫ると資金獲得のため、商売上の宣伝合戦がくりひろげられる。特に不況だといわれるこの年の瀬、朝刊と共に届けられる広告が、ドツサリと消費者の目を奪う、人が飛びつきそうな文句と特価品の値だんが大衆を引きづつて特売場へ急がせる。

少しでも安くて品の良いものを選ぶ心理は、われわれ

貧しい者に共通らしく、特売場に繰りひろげられる物あさり風景は、人の世の悲しさと、社会のあつたらしい世相を表わしているかのようだ。

≪^{きね}杵の音不景気なんかふつとばせ≫

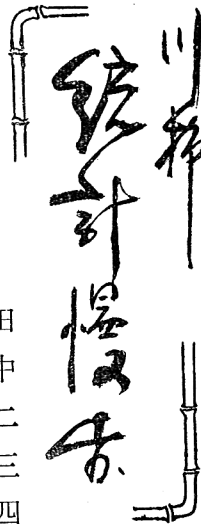
年の暮れの風物詩、お餅つきも、最近では機械化によつて餅もすこぶる能率的に、ガチャン、ガチャン、ビヨロと簡単に作られてしまふが、ところによつてだ、昔ながらの懐かしい餅つき風景がみられる。せうの湯気に煙むる台所、威勢のよい杵の音に、子伊達の正月に対する楽しい夢をもち込んで、お供え餅つき餅が座敷にいつばいにひろげられ正月を待つ。物上りによる生活のきびしさは、もうごめん、威勢の餅つきでこのもやもやとした不景気もふつとばして、来年は明るいニュースで暮らしたいものである。

≪倒産の店にわびしくピラがゆれ≫

不景気、倒産、経済の嵐はいろいろ問題を提供して私達の周囲をおびやかす。小企業の倒産など今年は暗いニュースもあつた。戸閉りをしたままのあかずの店、その店の戸にベタベタと貼られた大安のピラが師走の風にあおられて人生の無常一層わびしく感じさせられるものである。

≪^み巳が送り午が迎える除夜の鐘≫

巳年の終り、すなわち蛇年の後退する大晦日の夜は更けていく、そのすがた、その習性かたにいみきらわれるこの蛇が、えとの巳に当てはめられている。そしてこの冷血動物にまつわる多くの伝説や話などが、さらに不気味なものとして愛されざる存在となつてしまつたようであるが、賀状やカット図に表わされる蛇はまことに愛らしく表現されている。さてこの除夜の鐘に送られて午君へバトンタッチされようとする。ここに登場するウマは60年ぶりにめぐりくるあまうまであるひのえうまという女性の敵である。今こんな馬鹿げた迷信は信じないと思うが、昔はいろいろな悲劇をまきおこしたようである。巳年君も一年の無事に果たし12年間の冬眠生活に入ろうとしている。



田中二三四

(15)

統計の発表

1965年農業センサスで表彰

このたび、1965年農業センサス実施に関係する市町村、指導員、調査員のうち、その功績に顕著な者に対し、農林大臣表彰が行なわれました。

表彰者は次のとおりであります。

田中 太郎	統計課	県職員
佐藤 盛一	桂 村	指導員
山崎 四郎	下妻市	調査員
山本 清	阿見町	〃
表彰者	常陸太田市	真壁町

農業センサスで農林統計協会から表彰

1965年農業センサス実施に特に尽力された方の表彰に、財団法人農林統計協会では、このたび全国の表彰決定をみた。本県関係では下記の方が表彰をうけられました。

松男	東海村役場職員	指導員
----	---------	-----

統計協会から表彰

本市町村で行なっている統計大会等で、永年勤続関係職員が表彰されておりますが、そのうち昭和41年度に茨城県統計協会から総裁賞をうけられた方は次のとおりであります。

益子 関介	16年	谷和原村北島 芳	15年
石川 淳	15年	豊里町 岩瀬 守作	13年
矢吹 四郎	15年	筑波町 日下部勝彦	14年
柴 道雄	10年	大穂町 山中 孝行	12年
飯村 進	11年	東 村 根本 弥一	10年
横堀 孝一	10年	〃 坂本喜代詞	10年
佐藤 逞男	12年	谷田部町中沢 由江	18年
森田清五郎	19年	伊奈村 渡辺 三郎	15年
鈴木 博	18年	豊里町 久保田甲久	10年
坂入 光治	17年	谷和原村谷田鉄五郎	14年
野沢宗五郎	17年	筑波町 樋口 潔	12年
大藤 利隆	21年	大穂町 小林 繁	10年
岡田 良	14年		

昼間人口調査集計中

昭和41年10月1日に行なわれた国勢調査に付帯して行なわれる本市町村の昼間人口調査については、現在集計の作業が完了し、来月3月末までには、一般に発表できる予定で鋭

意作業を進めております。

この昼間人口調査は、急速に発展しつつある県、市町村において、その交通対策、都市計画等もろもろの行政施策の資料とすべく要望され、行つたものであります。

その調査結果によつては、当然それに添つた対策が要求されることであろうし、また、市町村にもいろいろな影響を及ぼすことであろう。その点からも結果は一般から期待されていきます。

県民手帳売れきれ

昭和41年版茨城県民手帳の頒布については、県下市町村関係者のご尽力をいただき、お蔭様で年内に完全に配布を終了いたしました。深く感謝いたします。

41年版はデザイン、内容とも新しい構想で製作いたしました。非常に好評で追加申し込みに忙殺されました。品ざれでご迷惑をおかけした向もあるかと存じますがご了承願います。間もなく新しい年、1年間県民手帳を愛用願います。

消費者物価の上昇が

所得の伸びを上回つたら

今年に入つて、所得の伸びが消費者物価の上昇を上回つたのは、1、3月の2か月だけで、2、4～9月の7か月は、逆に消費者物価の騰貴が所得の増加を上回つて

いる。これは何を意味するかというと、いうまでもなく、実質的な所得の減少ということである。すなわち、せつかくベース・アップで所得が増えて喜んでみたものの、物価の騰貴がそれをくつてしまい、ぬか喜びに終つてしまつたわけである。それに現われた現象はというと、家具什器、衣料といった耐久消費財の買いひかえ、さらに深刻なのは、食料の切りつめである。まことに残酷物語である。

いよいよ歳末

昭和40年いよいよ歳末を迎えました。本誌もこれが本年の最後です。1年間いろいろご協力いただきましたことを御礼申し上げます。仕事は28日で休暇に入りますが、また来年正月4日から始めます。どうぞ統計関係者の皆様おからだに気をつけられて、希望に満ちた輝かしい新年をむかえられますようお祈りいたします。

近 着 統 計 資 料 案 内

図 書 名	調査年 刊行年	発 行 者	図 書 名	調査年 刊行年	発 行 者
総 記			岩 手 県 報	40 年	岩 手 県
国勢調査報告(10%抽出)Ⅰ	35 年	総 理 府 統 計 局	県民所得の地域分析	38 年	山 梨 県
“ (“)Ⅲ	“	“	長野県産業連関表	35 年	長 野 県
“ (“)Ⅳ	“	“	岐 阜 県 公 報	40年8月	岐 阜 県
住民登録人口移動報告年報		“	群馬県鉱工業生産の動き	40年1月 6月	群 馬 県
原子力白書	39 年	原子力委員会	京都市の食糧事情	40 年	京 都 市
都道府県別将来推計人口	40 年	人口問題研究所	商業統計調査結果報告書	39 年	島 根 県
人口問題研究所年報	“	“	生産動態流通統計調査年報	“	東 京 市
統計行政の推移 全国都道府県市町村世帯 及び人口概数	40年10月	行政管理庁統計基 準局 総 理 府 統 計 局	畜産物流通統計調査結果 (Ⅱ)	40 年	宮 城 県
産業・経済			北 海 道 の 姿	“	北 海 道
工業統計表(企業編Ⅱ)	37 年	通 産 省	本 県 経 済 の 動 向	“	群 馬 県
国 税 庁 統 計 年 報	38 年	国 税 庁	長 野 県 の 輸 出 産 業	39 年	長 野 県
植伐面積と苗木生産量等 スーパーマーケット等に関 する調査	39 年	農 林 省	鳥 取 県 要 覧	40 年	鳥 取 県
法人企業投資予測統計調査	40年9月	経 済 企 画 庁	グ ラ フ し ず お か	“	静 岡 県
消費者動向予測調査4半期 調査結果	40年10月	“	横 浜 市 の 工 業	39 年	横 浜 市
経 済 白 書	40 年 版	“	統計調査員のしおり	40 年	神 奈 川 県
中間農業センサス結果概要	40 年	農 林 省 統 計 調 査 部	1965年中間農業センサス結 果速報	39 年	京 都 府
法人企業投資実績統計調査 報告	40年10月	経 済 企 画 庁	昭和40年国勢調査概要	40 年	滋 賀 県
消費者物価指数(全都市)	40年10月	総 理 府 統 計 局	勤 労 者 の 賃 金 実 態	39 年	三 重 県
“ (東京)	40年11月	“	主要物資流通調査報告	38 年	高 知 県
農村物価賃金統計	39 年 度	農 林 統 計 調 査 部	農業経営基本調査報告	40 年	東 京 市
法人企業投資実績統計調査 報告	“	経 済 企 画 庁 調 査 局	1965年中間農業センサス報 告	“	“
法人企業投資予測統計調査 報告	40年9月	“	長 野 県 勢 要 覧	40 年 版	長 野 県
工作機械設備等統計調査報 告	38 年	通 産 省	統 計 年 鑑	38 年	山 形 県
石炭・コークス統計年報	39 年	“	“	39 年	“
管内経済統計年報	“	関 東 財 務 局	統 計 書	38 年	石 川 県
東京都消費者物価指数(速 報)	40 年	総 理 府 統 計 局	中間農業センサス結果概要	40 年	和 歌 山 県
社会・労働			茨 城 県		
労働力調査特別調査報告	40年3月	総 理 府 統 計 局	事 業 統 計	39 年 度	日 本 専 売 公 司 地 方 局
“	39年10月	“	日立市家計調査結果	“	日 立 市 企 業 調 査 課
教育・文化			1965年中間農業センサスの あらまし	“	土 浦 市 企 業 調 査 課
学校保健統計調査報告書	39 年 度	文 部 省	茨 城 県 総 合 振 興 計 画	40 年	茨 城 県 農 業 支 援 課
“ 速 報	40 年 度	“	茨 城 県 農 業 史(4)		茨 城 県 農 業 支 援 課
各都道府県			生 活 保 護 統 計 年 報	39 年 度	茨 城 県 農 業 支 援 課
北 海 道 統 計 書	38 年 版	北 海 道			茨 城 県 農 業 支 援 課

大久保今輔(6)

前田香径

と結び、その推挙で藩士に列した今輔は淡路守峰姫の結婚にも一役買って暗躍したといわれ、こうして三者は互いに利用し、利用されつつ今輔の地位は急速度に昇進した。彼の役歴と「水府系纂」から転写する。

文化2年4月、5人扶持、文化2年12月、15人扶持、同3年2月20人扶持、同6年9月、百石20人扶持、同7年7月、50石、同年8月吟味役列、同8年6月代官、同9年12月格式勘定奉行、同9年9月格式勘定奉行、同10年12月格式留、同11年12月御城附格、同12年12月小普請

組の小普請組は左遷である。烈公の襲封は文政12年であるから、今輔の左遷は烈公襲封の2ヶ月後である。同時に今輔の経営していた江戸の米会所と無尽講は没落した。彼に対して水戸へ移住せよという藩令であつた。

東湖と謙という人の撰文した墓碑銘にある「朝夕暮々花月而已」の一句から推して、彼はその年亀作村へ長い年月離れていた故郷の山河に接し悠々消閑を送ることになつたのである。

東谷と東湖の私記をあつめた「事修叢書」に東湖が平七(号清虚)へ送つた一文が載っている。

「(前略)序に今助下向延引の事も相添建白仕度、別封手元迄差上候事に御座候、御序の節御上達被成下候事不奉至願奉存候、最早遂事不諫と申勢に相成候も、殊に第一の急務と申にも無座候へ共指懸り候事に候」

東湖のいう「別封の建白書」は記載されてないがその内容は分らない。ともあれ彼は留守居列を免れて小普請組へ左遷され、食禄五百石を返上し御暇を出したのである。石川久徴の「箕水家乗に」

「天保2年6月21日大久保今助願の通り500石差上、但20人扶持被下置」

この一文を見ると、藩命による彼の移住は3ヶ月前に延引していたようである。東湖はそれを不都合の建白として烈公へ建白していると解されるが、彼は500石の士分であつても、江戸には本来の商賈をいくつか経営していたのであるから、帰国するにはその残務を整える必要があつたと思う。「箕水家乗」に「大久保今助」とあるが、遠慮は藩主や僧侶に科した刑罰の一

種であり、逆塞や閉門よりも軽罪ではあるが、しかしそれに背くことはできなかつた。

定府城代家老榊原淡路守は哀公と峰姫との結婚を斡旋した功によつて、水戸藩としては破格の大老の職名を賜つたが、病弱な哀公には実子がなかつたので当然継嗣問題が起つた。淡路守一派は閨老水野出羽守と密かに結んで將軍家齋の第四十七子清水僕(恒之丞)を養子に迎えて水戸家を嗣がせようとした。ところが水戸家侍臣岡井富五郎(号蓮亭)は哀公の遺書を秘藏していたので、哀公の弟敬三郎(烈公)が第9代の藩主に決着した経緯はすでに知られている通りである。この継嗣問題のとき今輔は淡路守の内意をうけて柳営方面に策動したといわれているが、彼と淡路守との従来関係から見て、あるいはそうした事実があつたかも知れない。

烈公が襲封してまもなく、家老榊原はじめ側用人太田誠左衛門、奥谷筆別所左兵衛、庭奉業関十兵衛らの一味は罷免されたが、同時に今輔も食禄を召しあげられ、小普請組に転落、江戸の店を養子に委せ、天保2年(1831)6月郷里の亀作村へ帰つたことは前述の通り、草深い田舎に起臥してみると昔ながらの秩序の中に貧しい生活を続けている農村の人達のみじめな現状に同情せざるを得なかつた。彼が江戸に出てから40余年、粒々辛苦の結果築きあげた地位は一夜にして崩れ去つたが久しぶりに帰郷してみると15才のとき養父の叱責から家出した当時の哀れな自分の姿を想い浮かべて懐旧の感慨に耽つたことであろう。ともあれ今輔が水戸藩に任官してこの年までの13年間は彼の最も得意な時代、文政10年冬(11月25日)小石川藩邸が焼失したときは、その建築費として一万両を献納した彼であつた。その功勞によつて翌11年12月、勘定奉行から留守居物頭列に昇進したが時に71才。普通なら御役御免を機会に隠居する齡であるが、彼の事業慾は退屈な田園生活などに甘んじていることをゆるすものではなかつた。再起の夢を捨てようとしなない彼は「天保二年辛卯八月二十一日暇を賜ふ」(水府系纂)とあり、まもなく江戸伝馬町の吾が店に帰ると忽ち近江の琵琶湖干拓を目論み、75才のときその実地検分のため旅に出たのである。老を知らぬ彼の精力と情熱には敬服せざるを得ない。墓碑文は「俠気の風を抱き隣里御党之を非常の人となす」と記しているが彼はたしかに希大の偉材といつてよい人物ではあるまいか。